

みみだより

松江ろう学校 支援部

NO.R1-2 2019.7.17

今回の『みみだより』では、ろう学校^{がっこうざいがくちゅう}在学中^{がくちゅう}に学んだり身につけたりしておく、卒業後の生活に役立つという態度や習慣^{たいど しゅうかん}などについて、高等部の廣戸先生^{ひろと}と寄宿舍^{きしゆくしゃ}の金子先生^{かねこ}から原稿^{げんこう}を寄せていただきました。

また、もうすぐ夏休み^{はじ}が始まりますね。長い夏休みの間に聴覚障がい^{ちようかくしやう かんけい}に関係した本で、「この本いいよ〜。」とか「読んでおくといいよ〜。」という本を校長先生と川谷先生^{かわたに しょうかい}に紹介^{しょうかい}していただきました。学校^{がっこう}の図書室^{としよしつ}に置いてある本もあるそうなので、幼児、児童の皆さんは、おうちの方と一緒に、あるいは生徒の皆さんは、この機会^{きかい}に時間を作ってぜひ読んでみると良いのではないかと思います。



聴覚障がいのある先生から

《高等部 廣戸先生》

片手だけで会話ができるの？

ろうあ者が片手だけで会話しているのを見たことのある聞こえる人から「片手だけで会話できるの？」と時々聞かれる事があります。ろうあ者同士では、運転しながら片手だけの手話でもスムーズに会話ができます。電車が混んでいる時とか、傘をさしながらでも片手だけで会話^{じゅうぶん}が充分にできます。手話は殆んど両手を使って表現しますので、片手だけでも充分に会話ができるなんて考えられないことでしょう。

手話は手だけでなく、表情を豊かにすれば会話ができるということです。「目は口ほどにものを言う」という諺^{ことわざ}がありますが、目の配り方とか頬の動きなど、それらを含めての表情は非常に大切だということです。手話をいくら上手に表現しても、表情が乏しければ伝わりにくいということもあります。手が動かさなくても眉、頬、唇^{まゆ ほお くちびる}などを使うと内容を充分に伝えることができます。顔の表情の中で大事な動作は頬の動きです。昔の人たちの手話は頬の伸縮^{しんしゆく}や膨らませ方に特徴があったそうです。

日本語対応手話では口を動かすことが頬の動きの妨げになるので表情での表現がしにくくなります。手話は表情が命と言われるくらい非常に大切であるということを知りたいと思います。

《寄宿舍指導員 金子先生》

「子ども時代の体験^{たいけん}から学んだこと」

今春から寄宿舎で舎生の皆さんと一緒に生活している寄宿舎指導員の金子です。私自身難聴で、これまでたくさんの方々に支えられて来て、今こうして自分のしたかった仕事ができます。

私が、小学校3・4年頃の体験をお話したいと思います。学校での友達とのコミュニケーションで、「聞き間違い」→「勘違い」をすることで、周囲との関係がうまくいかず、私自身泣いたり怒ったりする日が長く続きました。聞こえにくさからくる「聞き間違い」をしてしまうということもありますが、「人の話を最後まで聞いていない」こともトラブルの原因になっていたことが先生の話で分かりました。例えば、友達が自分の名前を言うだけで自分の悪口を言っていると思ってしまったり、会話の後半で大切なことを言っているのを聞かずにいたりしていました。そんな経験をしながら『相手の顔を見て最後まで話を聞く』ことや『聞きとれなかったことや分からなかったことは確認する。』ことの大切さを、身をもって感じたのです。今も人と話をする時に、心がけていることのひとつです。

相手の話をしっかり聞くことができるようになると、自分の知らないことを知り、新たな発見があったり考え方や感じ方の違いを知ることができたりと視野も広がり、会話も楽しくなると思います。

「聞く力」と同じように、大切にしてほしいのが「伝える力」です。会話はキャッチボールで、自分の気持ちや考えを表現することも大事なことです。どんな本でもいいので、ぜひ読書をしながら新しい言葉を知り、表現力をつけていってほしいです。

「聞く力」と「伝える力」のこの2つのバランスをどうとっていくのか、人との関係の中でそれぞれが学んでいってほしいと思います。



本の紹介



幼稚園・小学部向け《川谷先生より》

手話で話そうシリーズ

手話は、手やからだをつかうことばだよ。ひょうじょうも、だいじだよ。さあ、しゅわしゅわ村で いっしょにやってみよう。



＜しゅわしゅわ村シリーズ

＜せ さなえ 絵・文＞

【しゅわしゅわ村のどうぶつたち】は、動物の手話が中心ですが、その動物たちの絵を見ながら話を膨らませていける絵本です。細かなところまで描いてあってよく見ると楽しいですよ。

【しゅわしゅわ村のおいしいものなーに】は、なぞなぞ形式で食べ物の手話が描いてあります。「てにもってるもの なーんだ？あまくてつめたいとけるもの これなんだ？」答えは・・・「ペローンペローン アイスクリーム あーとけるー」、見ながら楽しく手話表現ができる絵本です。

【しゅわしゅわ村のだじゃれ大会】「うしのうしろでうしししし もーすぐうしもーわらいそう。なんでわらっているのかな？」という、牛がたくさんでてくる言葉遊びから始まります。絵本を読み進めていくと、もっともっと先までだじゃれで続いていく、おかしい絵本です。

ご家庭でお父さんやお母さんと一緒に読んだり、手話を知らない人や今から手話を覚えたいと思う人と一緒に読んだりしながら手話表現を試してみたりしても良いと思います!!



中学部・高等部向け《校長先生より》

【難聴児はどんなことで困るのか ～豊かな心とことばを育むために～】

木島照夫他著 難聴児支援教材研究会



70P の薄い冊子ですが、きこえないとどんなことでつまずき、折れやすいのか、またどんなふうにとことばや心を育てていったらいいのかといった内容で、中身は濃いのにとても読みやすくてわかりやすい本です。保護者や教職員に聴覚障がい教育の入門書としてお勧めです。子どもから自分の障がいについて訊かれたらどうしたらよいかといった「こころ編」もあります。また、きこえない本人にとっても「あるある!」「自分だけではないんだ。」といった自己理解のための手立てにもなると思います。なお著者は日本語文法指導などの指導で本校でもお世話になっている木島照夫先生です。

【四つの終止符】

西村京太郎著 文春文庫



トラベルミステリーの第一人者として有名な作家の聴覚障がい者の社会問題を取り上げた推理小説です。実際の「蛇の目寿司事件」をもとに冤罪のろう者を取り上げ、偏見への批判を誠実に貫いていることに共感をもって読みました。50年前のろう者の置かれた環境やろう学校の状況が丁寧に描かれていることにも興味深く引き込まれることと思います。

【デフ・ヴォイス 法廷の手話通訳士】



丸山正樹著 文春文庫

仕事と結婚に失敗した中年男・新井尚人。今の恋人にも半ば心を閉ざしているが、やがて唯一の技能を活かして手話通訳士となる。ろう者の法廷通訳を務めていたら、若いボランティア女性が接近してきた。現在と過去、二つの事件の謎が交錯を始め…。マイノリティー（社会的少数者）の静かな叫びが胸を打つ。とは文庫本の裏表紙のあらすじより。仕事柄どちらの世界にも属せない手話通訳士の立場から聴覚障がいの世界と心の葛藤を描いた感動のミステリーです。

【奇跡の人】



原田マハ著 双葉文庫

私が最近ハマっている小説家、原田マハさんの、題名どおり明治時代の津軽を舞台にした日本版の「ヘレンケラーとサリバン先生」です。目が見えない、耳がきこえない、口がきけない三重苦の「れん」が「去場安」に出会って一歩ずつ、いや一進一退しながら人間らしく成長していく感動的な内容です。大切なのは、信じること、あきらめないこと、尽くすこと。人間愛にあふれたマハさんらしい作品に仕上げられ、読み応えがあります。